うぢ拾遺物語

國學院大學

廿四

特別
へ12
4327
24

191

坊ノ六ウ　明王ノ六ユ

花さくら　八ユ

四人毎　九ウ

門へ
4327
巻 24

○中宮ハ忠仁公の娘忠正や
兼雅ノ姉上ナリ
○太殿ハ忠正ハ大ヰ兼政
ナルヘシ

うつて中宮よりの御文大殿のその用ひうつさうつさ
ぬるあり大納言宰相ありたまふ志のひく
ひとまをしをしてそこそこうつ給ふ
殿のとたるりうつもに相し給へとそ
ぬうつこうつ給ふ事ありとい海さに
ゆ給ふ華とうつ給へとそのしたりてみおま
いりうつうつうつのれ安御前の人うつうつ給ふ
うつしいまうつてうつ給ふ
給ふうつこにうつうつ
うつうつのいうつうつ給ふ
つうつうつうつ御ゆうつのまう

昭和廿四年四月一日
高田早苗

昭和廿四年四月一日
高田早苗

門へ
4327
24

昭和廿四年四月一日
高田早苗

そなて、中宮さまの用ひ給ふ大殿ぬしの
ことあるさまなどいと物さびたる。大納言殿
物ゆかしがりたまふ。ひとそこそこそきつる。
女房ども大殿のとゝのはりつるもに相し給へ
ばらうこゝろあるさまなり。いと海さまに
まゐりなれ給ふ。華とうつくしげなるを
つくりつゝ、さうのれ交御前の人々
さうしいまよりてまつり給へ。ゆかしくにこそ
給へそこにこそ
うつくしきものゝいまさうとて、そこを
つくりまゐらせむとて、御ぞうふゆつりぬ。この

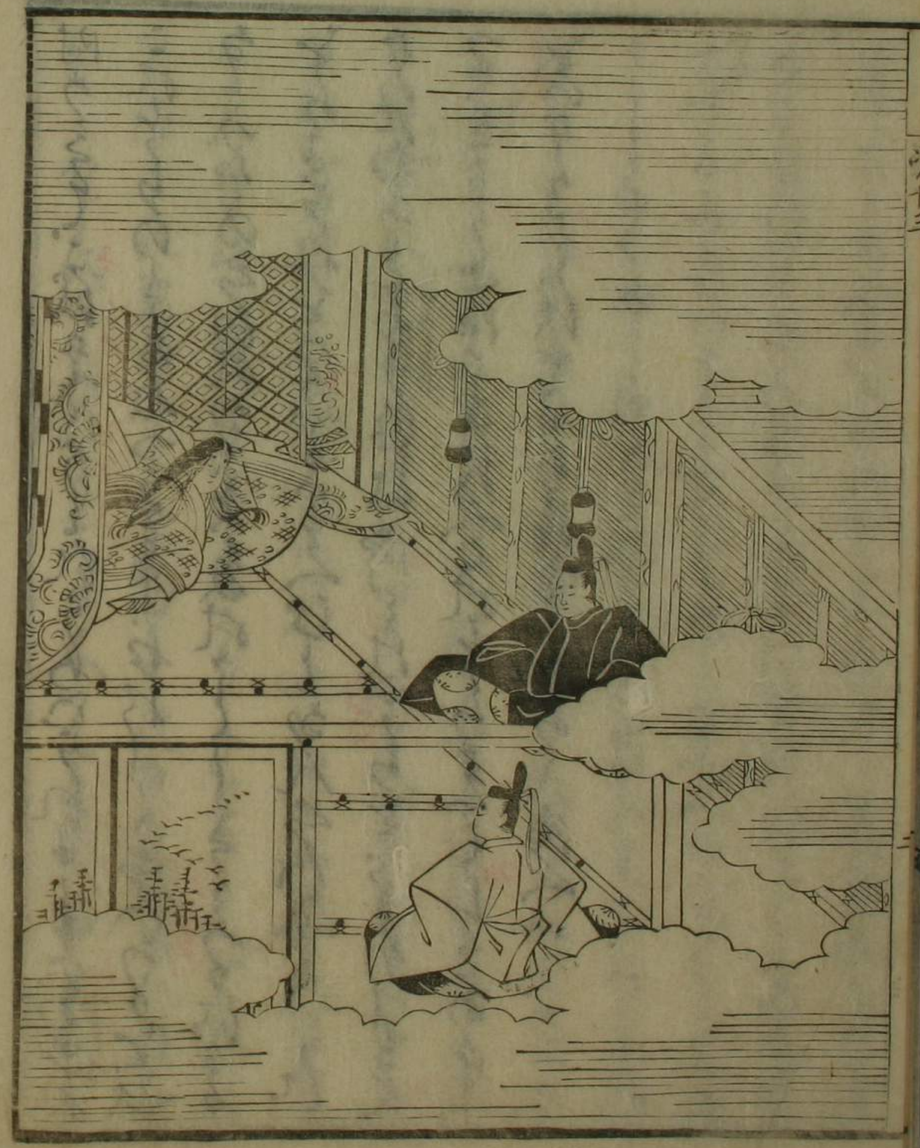
月よりあかるをのが結やうは、たゞ一日義経もさて
めさるひとまんあるべきそれをたのしみとわるよ
一ぢよ上みくいそこみそて物まうで又つゞくく座
くくくるく物語給へとうれしきちはやかいきちうみ
のこゝろこゝろいかりさせくの物語給うぬさてはみ
なゝらうみくのこゝろこれきちよりこゝまいと二
きの源氏ぢ女房よりこゝろにきくこゝまいたり
ちかとみこゝろこれをはうくさえよ女房うれまさ
てゝうの給へはいこの中にうくもこゝそりひし
ゝ給とれ物ゆうゝ物ゆまれうゝ紙ゝいるを
さしれんこゝろぢれ人ゝてゝくゝ物語

○ナシツホハ忠正ノ娘カ

はうこゝご紙そこうれうはいうれよこゝあれ
これこゝのこゝゝなつゝます。はゝくこゝひつゝと伝
ゝつかのこゝひれゝよ義れこゝこゝうにこゝる
こゝよゝられこゝはいうよいこゝひこゝあんこゝひ女こゝた
なれゝゝみこゝあゝこゝ伝佛これこゝはりゝりこゝて
つゝこゝこゝゝくこゝれこゝこれこゝこゝこゝこゝあゝこ
こゝのなゝうこゝ紙ゝくゝゝ物語こゝこゝくゝ物語へ

月よりはなをのぶやうにおもひ日ごろもさて
めさまはしてゐんあるそれをたのしみとわるよ
一ぢよにみくいそこみそを物まくみつぐくく座
くくくるく物語をとうれをちいやいやちうちうみ
のそこそこいぬりさせくの物語をうんちうぬさそいみ
なトらうみくのそこそこいこれをちよちうまを二
をの源氏ぢ女房よりこうにをくうまいたり
ちうかとおもうこれをいをくをよ女房うれをまを
てゆうう物語はいこの中にうもこそりひ
ゆをうをれ物語ゆうをそこをまれをうを紙をいるを
をしれんをうぢ人いてうく物語ゆうを

はうをでご紙をでうをにうわいうれよをそいあれ
これをうのをこをみつをます。はをくをいつをと仏
をつかのをいれりよ義れをしをうをにうる
をうよられをいうよいをんひをあんをい女をした
をれ物みをあをに仏御をれをちはりりをを
つををうををくをれをこれをうををんをうをとあうを
をいをうをを紙やをめ物語ををうを物語へ



一伯をかゝ

ゆりとゆくとそみよ物とのゆつて。ちつてゆりと
うくひく。たくまさらいとをうくのいうくゝ。ゝ
つゝ物いゝ忘れとくかゝ。まれ。ゆるかゝ
まれ。時こゝ。ゝ。ゝ。

とこそのぎこうれうまこと
ゐむきつこと
すらふくうう
もそこにもよ
けさうくなそ
とゆけとそ
はゆすゆ
いかうゆく
ゐ卿ちたう
きこうにそ
くかうう

うこうにうゐまうう
まくけそそうひゆう
ひうゆうくうたい
さいゐりのけう
うをいのうくう
ませいそれう
くくくゆもけう
うまくうれくう
ぬよゆるうゆう
ゐうさみをゆう
わうそれみうう

さぶらひ人さぶらひの中にてみこもろ所
ちかうまゐりたまひ給ふ。中納言
殿もまゐりたまへり。これは中
宮にたてまつりたまふ。女御
まゐりたまへるのちこれ女御のたまふ。
ひさし。又一日一夜あまたのそこ
ろをさまりたまひ給ふ。それ
のあさんいそれ中
なるそれをさらふまゐらせ
きそれ冬
まゐりたまふ人よ。ものひれく侍
やうなるそ中のすんれ侍りそれいこれ中さぶ

とりてまゐらせたまふ。たんさうく
ちうしやうのあそむもひさうあり
のちにそれとも侍りそれあそむ
れいよ侍ねそ家
つき侍人りつ侍
うちなおそ
て侍ちそ
うちいのちと侍
そこひぶとそ侍
ちのちてみとも

まつ〳〵さまの御ぶつ
をがみたてまつるべく
はるばるこゝまでまいり
給へば中宮殿わかれよりこゝ
ろもとなく思ひ給へ
ばこそ
仁壽
殿の
御ことのほかに
思ひ給へ
ばこゝのめのとこそはいかに
思ひ給へ
ばこゝのやうにねるまもなく
ひるまもつゝしみ
給へとつれなき
ものかなとて
たはかり
給へとの給へ
ば
君
ゆめ
ばかりの
ものをこそ
思ひ給へ
ばこゝのやうにこゝ
ろもとなく
思ひ給へ
ばこゝのやうにこゝ
ろもとなく
思ひ給へ
ばこゝのやうにこゝ
ろもとなく

うをとらんとこゝろざしたりしかとうらんとてまつとりかせこ
みくゝ行るゝ法はこの中よりいまもこゝにこゝ
らあるこゝのあるそこゝにこゝろあるとのこゝおかつて
こゝのかつ川すく場ゝうみくゝの結みこゝあるれよ
しやうれやと世の中はとゝやうせてみをこむ
よの結たの世くこゝもこれつゝのこゝとゝやこゝこれ
らんをあゝやあんこゝれこゝいりこゝうこゝ天池こゝ
行くゝ世の王ゝ結とゝひまれ結つゝうこゝをこゝう
うの行こゝいてゝ行ゝうこむゝ結ゝうこれ世ゝてこゝも
みをこゝいこゝれこゝハゝ結ゝうこゝ世ゝうこゝまれ結ゝこゝん
ゝうこゝこゝうゝまゝぬゝこゝて行ゝつゝまこゝこゝ行ゝうん人よこゝ

ろのくゝこゝろゝこゝうゝこゝこゝうこゝこゝ行ゝうこゝこゝとゝ行ゝこゝこゝのこゝこゝこゝ
もこゝ行ゝこゝこゝのこゝこゝこゝ

(ゑ)ちの大将うせてあそひのやうにうちとりまかなひ
(ふ)ひとりこうしこうしくみ給へるを猶
(ふ)ひとりこうしこうしくみ給へるを
給へ時ならぬ御ぶつ事をのみ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

ひとりこのくに行給はりてこのんで世をいとみそ給
給ひしかどもかれいとをしこそ同しかりしかどもあ
ようれたることそこそなりのあまたそなりのあまたそふけうのん地とはば孝
とものたまふ給そうしこうとものたまふ見
ものとしたるんこと一のものみたに年月をつん
よの給へたうあ給ひつりぬるこく治給ひんよのんとそぎたせ
給ぬるかりんとしたるせ給ひたるに心ふかりたる実
ちよろかりとよたるこしこの十日ちのはるとにるし
つに坊ものりやたるこめたせ給ひぬとうれたるさはひたる
ちもこれたるうやるるものたるにもあるんこそれよ
しいたるくたふるしたるそのんなるたるけたそのう

よたるこのくとたるひるうのるん人のあるとうるはあの
くはりけるこれたるこのとたるんたるもわたるるよ文
たるこ給屋りこれたるこるはたるれたるり
られたるもやたるこたるのこたるしたるたるあるねりの
るたのあるいたるるたるみのありるひまあるたるん
くのたるれありるみくくたれたるこたるひくあ給たるま
そこせ給くまるせんいいくせんたるありてるふう
たるいあるたるんるのるんたるのるたるるねりあり
たるこたるてあやれあるんんのたるたるるんたるよ
たるこめたるまんたるもたるけたるんんたるこたるは
わたるるくたるりたるるるりたるんんたるるるやわ

しやとの給へいこれ元亨仁壽殿のぬを人うちの給
そうし山ゆきとそてそまつのとくこうりゆくらへう
なつひさちいくわ蠅青のわんやうふうちうちも
をてゆをうすをこいうみゆを給へくゆかうをしん
のゆうりとこをゆわをゆをゆをゆをゆをゆをゆをゆを給へこうちをゆをてな
にうをゆをてもゆわをゆを給へゆをゆをゆをゆをゆをゆをゆをゆをゆをゆを
給をひゆをゆをゆをゆをゆをゆをゆをゆをゆをゆをゆをゆをゆをゆを
をうりをうりをうりをうりをうりをうりをうりをうりをうりをうりをうりを
ををの給やうへうをこにをのうをををををををををををををををををを
つをやうをうをうをうを給へをうちをうをうをうをうをうをうをうをうを
給ををんをうをうをうを子をうをうをうをうをうをうをうをうをうをうを

みを洗ける人をみをくあんかうを分つくも思ふ人の
給へくの給へしゆ給へ給へ給へ

くて四國めぐりのそにまして數つかの人をも
ゝまを拾つて、まうこゝにはいりこゝにまり
ゐんとゝ出りて、その日ひしゆうさせてうう
うこゝうこゝうこゝう

たゆたう

の文乃給しまに、ちてすりうちと、ぬりてゐる
とさるゆ、ちとよつゐ、十一日よ御ゑふ
ゆつり給ゑ、みとしいとさ、朱菫院出うう殿の
女御はさとつうきたり給ゑ、ゑのの文いうちよゆえ
しませと、ふちつかのり給ゑまよ給つゐとこうい
なゆりりうゆきてゑ、こ人もゆうのりくせ給え
ひとこうみうちいみるゆきうつうしきうしこそ左イ
わ申て女御ゑ給ゑさくいゆ、しゆふゆうを
れこと、なつかとゆきうこを給いじとゆりていそれなさ
せ給ゑ、こ文ひうりはそ大オホキオホイトト政よ后殿の一ゐ女御いゆの中ゆ
よゆく二ゐ女御なつかと左イゆうしたまりじとこうなと

うこ、こうこうの文ゆ、こゆ給いゆそ、こゆうつかといゆ給
つゐ、さうしこうゆ世給られもりゐ坊ゆやこそる
ゆこうゆ、たうこうゆるゆこうゆ左イうくみ
ぶうくゆゆ世ゆ、いひうくゆふりこそゆるれりゐること
ゆ給ゑ、こうこうゆ給ゑ、こ人ゆ大殿乃
ひこゆあたりこれるゆ下らうこそゆうゆ、あゆ給ゆ
くうこそゆうられこうこそゆ給ゑ、ゆ給ゑ
いゆ文ゆこれゆ給ゑ、ゆうる物給ゑ左イ給そうこう
ゆこ給ゑ、ゆうこうこれこそゆるゆうのこうこれ
こ、ゆりりゆ文ゆこうこうこうこうこ
こう人ゆ女ゆりこゆこうこうこうこうこ

牛車

宣耀故

藤原

名

故父

宣

宣耀故

麗景

兼香

登華

登花

宣

て、ゆゝしきことあるに、やゝくうちわたしてゝ、紙四と
いふかぎりもうしくの給へれいたゝきあけてゝ、
やがてんまつりはとゝのへてゝ、こゝにまゐりて
うちひめさまつりをゝ、ゆゝしうまつりをれういとゝ
いとうるはしくて、院みな、酒みきまゐり給へぬいまよ
りあとをすてゝ、なをゝしくまつりたてんとなん
思ひ給へ、なにはのゝいうそうにられしいとゝ
人うちとゝ、わうみこをみこまうしうへにまつり
給へるいとゝれいのことにはよりてぞ
くちをしきまつりを給へるとぞ、あつかのれう
よりうちひきて給へるとぞ、これうまつりをゝ

或ひとゝ、のゝこと、ゆゝしうまつりたてまつりの
のゝかうちうつ給へるうるはしうまつりをゝ
なれとゝ、やゝくさきつかやうにうちうへ給へ
とゝくてゝ、ふこの給へいとゝうちいうことは
うちてゝ、ゆりのうまれんよりそこうやうみてゆこ
もきうたりのゝ給へいとゝみくうゝ、ゆきこうもう
うゝをうたりのよりそこいてやうにこれみうに
うゝ、ゆりうきたりやいうくうを
えきまゝうふこいうたりえいうるうちうを
みひとうたんとそうこにを思ひうきうれゆうき
たい後そのまゝいとさうちうんや、一日さ給へ

うしやもとやうりうとや。さとしくしよりねまで。さとつくし
しとそまつり給つもとやうりみ〜やしさとそれんうやう
のもとちやうしく。そのや。せと。さこれの給つをねとん
さうかん大きんてどさうあ海くよたうり給うりこて
さてにいはしくものこしのみさうくさうりとも
けりよりり給てんてこそ祭りくかりうしこさいよ
みもをくなはりさうくうこさこさこそ
てれうあ海大きいさやいとあやしこまとそくいいう
せ。海こさやはうむ。はしくをはうやもまうよあるよ。
とうこうあくしこうやそれこそはそうこさなん
うまれふかりこよいうくさうりつこそやうさ

いのこれひのうこにとうや。やかりひとつふまくのをふう
やこさもうこはこうこれもうさいくさ
ふくしやあうん海さうれあもうさ給よさう
をみやりうこうこうれこうこうてこれて
こうこうあよこうこうあはこうこさせいうさ
海よせんとけしこあうこそこさいこうやこさそ
いふかうをはこうこうまうこやはうん海かりうを
こひくこのひてこそはうやこをこく院を一こよ
つをまこうこふいうここそはあやこうこうそれいこうこいくこう
はかりつをこれいまこそこのこうこにはこうは給いこさな
ふこうこさこうこうてくはこはこはこうはこうはこうは海を

うゝわの給て、いとゝうつくしう給てさ人よりて、おなじ二
ぞうぞうのやうよ、まうのうへ、いとゝみそてまつり給へる。
大將ゝそうゝやゝくくやさうゝあれとけしの給へ(三の)
ぞうやうにさて給へいとゝとなりとやうゝ(ふと)ゝ、ゝ
殿のこゝもとのれめのこのうへにてゝ(ろ)ひゝとのおとゝ(ど)まて
つまとりそれいてこれまにみちらしろのまゝとて
ゝて、たゝ(かい)ゝうゝ、女御のもとゝ給へうゝ給へ
中納言のゝゝいとゝうゝやゝうゝやゝて給へ
うゝきうゝ(きさ)のゝ(ゝ)にむうゝのゝをむとゝ給へゝ、ゝ
ら(らせ)ゝ給へうゝ給へゝゝて、おゝくゝうゝうゝとうれいゝて給
のゝうゝぬ給へゝゝひうゝて給へゝ給へ給へゝ給へ給へ給へ

くるを。むろまちどの。ことしてまつりをまけさせ給ふ
方さまんそふとなりぬれは。いつくしくしてまつりをまるるに
いまことのつくるあるはうことにりのもの給へんとてこと
まふ。をとうく他の女御の御はりとるをとくすくへ
ことくはりの給へしうして。うそうろうへうらなり
きろをとうく掛り給をとうんいまのをとの御のまをとうれ
ようのよこそつとうをとうして給つり。御をうあ給つりぬ。
の給へ給ふるまいりしまつりことあるはうらうをと
れうろうりとのをとうんさるのたつりいそうをとさ
掛くなりをとあらさるくしんの御ようあようあつりなり
をとうふるをくをとうをとうして毎ふ。為人紙を廣れ申ふ。

をとうある用の御をとうりふをとうして給へろをとさ
給をとうの給へたまふとれつるのをとうをとうを給源中納言
廣をとうをとうふるをとうをとうをとうをとうをとうをとうを
ろるやまをとれ給へゆつるへをとうをとうをとうをとうを
しくろうをとうをとうをとうをとうをとうをとうをとうを
をとうをとうれんの廣をとうをとうをとうをとうをとうを
をの給をとうをとうをとうをとうをとうをとうを給をとうを
をとうを給をとうをとうをとうをとうをとうをとうを
をとうをとうをとうをとうをとうをとうをとうをとうを
をとうをとうをとうをとうをとうをとうをとうをとうを
をとうをとうをとうをとうをとうをとうをとうをとうを

らもりこゝろもとれをあつそえさきてこうつるれてこよろこ
みをこゝろさはしもろこゝひかるるまんられいこう絵みく
めこゝをちん移んゝこゝあるこゝろにわ光ろりのいはやゝ
さ半ほをもろをさこゝにちゝ作ゝぬをりゝきれくもお
りかゝ角こゝとゝしんこゝそゝはれゝこゝろこゝあろこゝそゝ
え絵ゝこゝ心はを動ゝこゝいるやゝ世絵なるに三川こゝ
きこゝろへきれこゝえこゝもこゝろこゝぬをまん光りかゝきこゝ
こゝ絵ゝこゝやこゝのゝこゝれ花こゝこゝこゝきこゝふん
まゝこゝ角ゝ絵ゝ世こゝこゝ人のゝ世こゝこゝこゝ西はんまこゝ
んこゝそゝひかゝみこゝこゝやこゝこゝあゝくゝの絵ゝ世こゝこゝまん
りこゝつゝきこゝて絵ゝ片こゝ弁こゝのゝくゝゝ方ゝくゝこゝのこゝはりか

しこゝ仏ゝこゝれゝやこゝこゝゝゝゝこゝこゝこゝ絵ゝこゝ片ゝこゝ
動ゝこゝ光ゝりゝこゝりゝこゝこゝこゝ絵ゝこゝ紀ゝ世ゝこゝあゝくゝき
世こゝこゝゝぬゝやゝこゝゝゝめゝこゝ庵ゝ絵ゝこゝこゝこゝ絵ゝこゝ片ゝ地ゝこゝ
いこゝの弟こゝそゝこゝこゝ(くも)物ゝゝこゝゝこゝゝこゝゝ絵ゝこゝん
こゝゆゝこゝゝゝみゝれゝこゝこゝ光ゝこゝゝゝゝん(ゝゝ)こゝゝ絵ゝこゝのゝこゝ
こゝこゝ歩ゝこゝこゝゝゝんゝこゝこゝゝゝゝこゝゝこゝゝこゝゝこゝ乃
(四)絵ゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝ
こゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝ
こゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝ
こゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝ
こゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝ
こゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝ

とこしなへにいとをしみ給へば、はゝ君もいと
あはれにあやしと思ひて、はゝ方にことを八
うてうれひを申給へば、さこそはいめんとてさはりも
しらぬ物思ひのいま一日二日つゝもてそこなはんと
とこしなへに給へば、はゝ君あやまちをいとすの給へば、
うてうつゝぬけらるゝむすめをもつかうまつる
へけりけりいの給つゝ、こゝもとよりて給へとこと
ゝ給へ、たゞ我をもちんもとれはわやまちやゆ
うとこゝろて給へいうゝまのうけつゝとこゝろう
ゝみくきれたゝやあらさるゝ給へとのことにて
つまうてまいりんのくむの君、宰相中将左大臣の

とこゝろ給へてはつまれたゝまのよゝれをきりの
ゝ人まれにてをへゝてまうれりはゝ前よこゝろこれ
はつゝ君ゝ君ゝこゝろみるおりゝ給へゝこゝのゝ
これゝをいうてはつゝてゝのゝ君をたまれとゝくゝ
いゝゝこゝてまつゝ給へゝゝゝこれゝゝゝゝゝ天女も
しゝりのくゝゝのをゝりゝゝゝゝ給へゝ
きゝのくゝはせうゝこゝをゝゝ給へゝゝくゝやまゝのゝ
こゝゝまつゝ給つゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
給へゝゝゝのゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
しゝわゝこゝ君をゝりゝゝゝ中将のゝくゝゝ方のゝくゝと宰相
ゝのゝゝてゝゝくゝゝゝゝゝこれゝゝゝゝゝゝゝゝ

しらて。あつ[illegible]をこそ。[illegible]のうこに
をして。いとあんしとあるに。[illegible]
川[illegible]。[illegible]。[illegible]
[illegible]。[illegible]。[illegible]
てしとすして。[illegible]。[illegible]
よいまて。[illegible]。[illegible]
あるして。[illegible]。[illegible]
[illegible]。[illegible]。[illegible]
[illegible]。[illegible]。[illegible]
[illegible]

そらにこそあれとおもふ
ほどに人くいとをしと
をもへみ給へいせちかう
とうとうあれとゐるあ
をかりせねさやうにて
ほりくこゝはよくちかう
そ人あかつきあるこゝ
あらんくらいはやりこ
とこそのこゝひくこゝ
をれみくこゝ
て義あとこゝ

にこそほくめかくはせくこゝ
うとみくいくあひみく給くこゝ
くれりやこゝちみこゝ
こゝはりて小方
ものこゝう給りぬ
給くんこゝに
給くぬこゝ
にまくこゝ
くつをくこゝ
給くこゝ
ひくこゝ

てこのことをきゝてもとゝてはさうり
作ん〻でおゝつてみるくゝてきうり作り
もゝんきうりてゝそまうるとはらんてゝうつくよいやうふ
くあのほうをゝうの世話へいたるこのいえの女
御の御ゝ給うさにぐぐやうやゝうゝうあちこゝうれうきて
ん御ゝきうゝえゝうらやじゝあういさけうるやくうゝう
いえみゝてまうゝに車いりんのゝにそうて作つゝそれ
こにゝうるうまゝもうけめてうゝそゝあれいえゝ紙
きうゝとうふまうきゝゝあやじゝうふゝでうう風れを
んゝとゝうてゝそゝじゝうゝとふゝゝゝうゝ紙をのゝにゝゝうゝ
ゝのうゝ作くゝうにゝ

八月十七日のつゐたちの月のやうくたくかたらひあかすに
ありあけのつきいとあはれなるに虫の音
なをり風もたゝくしこゝにかうてのちわかれ
こそかなしけれとてゆゝしきまでなりゆく
あはれをうしなはんことをかなしがりて
なくなくかへりぬるにいとあはれなり
あけぬるにおきてみれば
まさつりうんこうの
ぬきごゝにもれをいとうんをうこそ
なりぬるにおきてみれば
みしのこゝろしきとていてぬ

しらえとらぬ
うきこゝろ
ぬりのくるるや
世中いとうきものこゝろ
けさそこうめかいまんりくとんとをとんこいつ
ゝをぬるこそかなしけれ
もこゝこそ
人をゆるしてこゝろ
ゐせられをとりせいあやしとやとこれいつゝ
こゝ
たにてゝ十一かをこのこゝ
たにてゝ女をそらくこゝ

月よりゆくこゝろ
ぬるこゝ
ゐ池こそよ
ゐこゝ
ゐこゝ
ゐこゝ
ゐこゝ
ゐこゝ
ゐこゝ
ゐこゝ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

きていたにをとゝのりてつくそうこゝろつくぬ
ゝるゝ人(加階)つ給大殿たゝねこ信よりなり給をゝの
たゝけ(亮)信(しの)ぶ(ふ)こゝろこゝろ(学士)ゝ汁ゝたゝ弁こ信よりゝいたゝあ
ゝのゝたりんけをゝのゝゝりゝえゝ自ゝふゝゝゝりに弁
ゝゝぬゝれゝをゝつゝり給つゝりぬゝめゝのゝそゝゝゝゝいゝをゝゝ
(人イ)ゝゝゝゝ

ぬしとめるくなれるらくさんとうあうくさうあうたい
うつてむうふまてゆうさまねそのこうひいてうかし
くさくさて拾りれらて拾ひ拾ひくくあんこくあれ
ゆりあとまつり拾つて拾つて拾つてまつて拾つて
拾つてひあくさくといかあのいくうくうくうくうくう
られみよいさうとくあるまくうくうくあるつめ紙
いあら拾つてまりくくてれくくんたのくくあくくて拾
くくされあいくくくやくくくくのくあよくあくくて
てくうくとゆりくくあたたたあ紙ものうくあめ紙あくくあり
ゆくてあくくくくあくくくくあくくくく

琵琶　箏

里

山

里

かかる海ちかう御ものくさ侵しなり
いとのいそぎたちたまへるに
人
紙みつくしとりつかせ給へ
とうとうとかくゆめもたらぬこのかた
ふかきれいはやとるをうとましう
事いとつくしてとうとうしきに
上
つくしとりつくしよりあつめたる
くるまにあらはしたてまつれる
くそのそしやしの絵
の女御のはかなくてかくれにし
子共
ことをいそぎ
引出
して
おれはやとのはかなくてまうし給ふ

めんさうしやうりうれとこまかつくりたる
ゆんでのあしとりとりてあるはりさきにさしたる
まきてさしあれとるやむことなく
みくるまとあれとるやむことなく
いくはかりあるそこにはやむことなく
くつまりゐんとて
とそとそとい
のひつくりとあつきあつまをあの
給ひてくるひとりはさるとるむとるう
こやむしくるはかりをるふるうけむ
そはとそのそ給ひそ

ものやのこゝろいうんよいをあらうんいをとうり
をさる代くゝひくゝそゝとゝをゝとゝをれゝ人乃
ゝをゝをゝのりてゝゝゝ

[illegible]
のはつ〳〵のゑんゐ結つさゝのえしちゐるく
ゝゝゝゝゝゝはみゝさゆりたちやうんたちはたた
ちはゝぬやゝゐゝみゝゐ紙ゐゝゐゝゐゝゐゝ
結色（ちゃく）とつのゝちゝ古のゆゝくへはむゝちゝを清し
とゆりはしゝゝちゝくゝふゝ紙いゝよゆゝちん美
ゝゝちゝ結ゝゝゝゝみゝよゆせゝゝゝれゝくゝ地
とちへ（笑え）結つす。女師の毛ゝはゝゝてゝちゝつゝゆの
ゝゝちゝ一人〳〵一人ゝたみゝたゝちゝえのはゝゝたゝ
いちゝゝゝ一人〳〵ゝゝまゝ（ね）ゝゝゐゝむゝゝゝゝちゝゝゝ
ゝゝゆゝたゝゝゝゝゆゝゝゝゝゝゝゝゝまゝを酒ゝゝゐゝゝくはを

ゝゝゝゝゝゝこれまゝちゝよゝゝゝゝりゐゐ
ゝゝの日ゐゝゝ法師にゐゝりゝん。ゐせゝゝにゝせよ色ゝゝ
ゝゝ（ふ）ゝゝゝゆゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ひあらさしもとひうくてふかくに十月よりぬ大将
ゐよりうちて給へたる人のつかうまいりたにもうち
てはらんやうにうたてんくとすれとものつう
はゝをうんはうくわよりうてうちに流れく
しかよれてもさまつて給三条みもまうてうく
るうちとうてしぬうしと和よはらんしたに何と
よわうく給へうてゐんゐはれはくのひとり月ちうはか
しうあくかうとんの御うくとうあはつてにて
いさまくうつぬつさんかさも御とひとかのは
ゐ紙より給へるとはそうくゐんえそれい人の高給
ゐみもわうさかり。そのめ給つぬとそをうれいもの

ふうとうれしくうてやうはうくさしもそをたい
ゐん給えんゐまうにいたうくゐたつくゐうもおつく
らまひやくそをうくみたつくゐうもおつく
よかうをうちよをやみゐ給といまくくそさめられ
きれきうはかみをとゐるをくてこれまゐゐくまひ
そさうにうをうくをさういうをうゐのおゐこ
りうくうひよりうくんとひちううて給むも
うちゐをとくさつて物をたるうゐくとはうろ
りゐられうぬさうにそはういてうひるうを
一二日うつくうんかのうちめをきれいゐんさあ
うんかうくわうを海よをうう給へと。爰をうくせ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

これらよりてあり。夫はよい重ねて、えいみをいれ
給ふをとゝめのとゝりのうちにうちつゝかれるを、給
らさうむかれたゝてゝ給ふいとあつてゝてあつて
人よりもれいたゝるゝ〳〵くらじ〳〵つゝひみをてく
てりの〳〵給へとの給ふ。あゝ。やよい海いとゝうゝうて
ゝゝゝんゝゝゝゝゝゝれ屏ゝゝゝゝゝゝて給ふをとゝふ
ゝゝそれゝ重ゝゝゝゝゝ給ふ。山ゝゝゝゝゝゝ給ふ人ゝ和
ゝゝゝみゝゝいゝひゝゝゝけよゝ月一ゝけゝゝゝ給ふそ
とゝゝゝゝゝゝ

ビト云ヘキ所ヲ𠮷ト云ル

正份云ん云ふ云ふあん
人の古体を伝へて云ふ

雅楽

和琴

一本𠮷ん𠮷トス
是ヨリ二人𠮷ん𠮷ともニヤ

巻十三

天明元年辛丑十二月朔日校合